

地上に降りた女神たち

琴座の大志館

序章 旅立ち

vegagee



1. 奈良の大仏さま

「信ちゃん。今日は若草山の山焼きやさかい。もうお客さんも来んやろ。ここはもう、しまいにしよ。この後、交通整理のボランティアもあるしな」
そう言いながら、彦田おじさんは、飾り棚にあるキーホルダーやストラップなどを、ショーケースにしまい始めた。

僕は、お盆の上にきれいに並べてあるお守を、お盆ごとショーケースの中にしまった。僕の名前は、異元信次（いもとしんじ）。平成元年5月27日の奈良県生まれで、今は大阪の某私立大学に通ってる。と言っても、もう4年生で、今日が1月15日。1年に一度の若草山の山焼きの日だから、あと少しで卒業してしまうけど・・・。

卒業したら、どこに就職するのは聞かないでほしい。なぜって、今までに50社以上エントリーしたけど、面接にたどり着けたのは、わずか3社のみ。その会社も、あっけなく一次面接で玉砕。まあ、面接練習をまったくしなかった上に面接で、「趣味は古いアニメ鑑賞で、特に松本零士先生の銀河鉄道999のビデオは、テレビ版、劇場版とも全部持っています」とか、「実家が奈良の大仏さまのそばの、みやげもの屋で、特技は鹿せんべいを売りさばくことです」って、ついつい、本音をしゃべってしまった自分が悪いのですが・・・。

大学の就活担当の職員さんからは

「あきらめるな異元君。立て、立つんだ！ジョー〜」ってノリで励ましを受けたけど、僕としては、50回以上も自分を否定されたようで、ボロボロになってしまいました。正直、「もう、ほっといてくれ」って感じでしょうか。

でも、4月からのことを考えると、すごく不安で・・・

僕は、片づける手を休めて、思わず合掌すると、5m程先を見上げて、祈りました。「大仏さま。どうか僕に道を、お開きください」と。

そこには高さが18mもある、世界遺産に登録されている大毘盧遮那仏像、通称「奈良の大仏さま」が鎮座しているからです。

そう、ここは世界的にも有名な東大寺のしかも大仏殿の中なんです。関西の子は必ず遠足で来る所で、それ以外の地域の子供たちもきっと、京都とセットの修学旅行で一度ぐらいいは、来たことがあるんじゃないだろうかと思っています。

そして、来たときは、きっと僕が今、立っているところからこの大仏さまを見上げた後、ひな壇状になって、クラスの集合写真をとってもらったか、あるいは友達同士で写メを取りあった場所だと確信しています。

僕はこの角度から見上げる大毘盧遮那仏が大好きなんです。なぜって？それは・・・

「信ちゃん？おい信ちゃん！大仏さん拝むのは後にして、早よこっち来て手伝ってくれ」

「あ、おっちゃん。ごめん」僕はあわてて、壁際に立て掛けてある、フタにする板の片方を持つと、

おじさんと二人で、ガラスケースの上に被せて、南京錠をかけた。

「信ちゃんが大仏さんを拜んでんの見て思い出したは、今日やったな、お母さんの命日。あれから18年か……。時が経つのは早いなあ、そういえば琴美さんも、ようそこから、大仏さん拜んどったで。でもあれやな、お母さん。べっぴんさんやったけど、どこか天然ボケ入ってる人やったな」

「ほんまに？」

「ああ、ほんまや、わしが、そんなに大仏さんがカッコいいんかい？」って聞いたら、琴美さん「うん。でも、出来たての時の金ピカでもう少し細い顔の大仏さまの方が、

若いときのお釈迦様に似ててもっとカッコよかった」ちゅうから、

あんたそれ両方、見てきたんかかってツッコんだら、

「うん。お釈迦様にミルク粥をお布施したのは私なの」って、もっとおもしろい顔していうんやったら、

嘘着くなーって張り倒せたんやけどなあ、あんなべっぴんさんに真顔で言われると、

わしも調子合わせて、そらええことしはりましたな。としか言えへんかったで」

もう一枚のフタ板を取りに壁際まで戻りながら、おじさんは思い出し笑いをしながら

「そしたら、琴美さんなあ「当然です。だってあのままほっといたら、お釈迦様が悟りをお開きになる前に

死んでしまうでしょ、ここで死ならたら困ると思ったんです」って、ほんま天然ちゅうか、空想好きの女学生のようにやったなあ。アッ。ごめん信ちゃん。堪忍な」

おじさんは「死ぬ」という言葉に気を使ってくれたようだ。

「全然、大丈夫ですよ。それより母のことが聞けて、うれしかったです」と言いながら

二人で最後の板を持ち上げようとする、おじさんが

「うっ、あたた……。ちよっごめん。また、腰やってしもたわ」と言いながら腰に手を当ててうずくまってしまった。

別のところの片付けをしていた、おじさんの奥さんが駆け寄ってきて。

「あんた、大丈夫か？そやからいつもいってるやないの。力仕事は若い人らに任さなあかんで、これから交通整理もあるのに、どないするん」と、早口で言い立てた。

口ではそういっているが、心配で、腰をさすってあげているおばさんのそばで、僕はとっさに合掌をした。

そして、目の前にある大仏様をもう一度見上げて、自分と重なるイメージを描いた。

「おばさん、ちょっといい？」と言いながら、合掌した手を開き、そっと、おじさんの腰にあててあげた。

「うおー暖かい。カイロみたいや。気持ちいいわー。あれ！あれ！もう、痛とないわ」

おじさんは、普通に立ち上がり、「すごい。すごい」を連発しながら動き回った。

おばさんは驚いたようで、まん丸な目をしていたが、飛び回るおじさんの首根っこをつかんで引きずってきながら、

小声で「信ちゃんもできるんか、病気治し・・・」と言ってきた。

僕は正直に、小学生の頃、部屋に飛び込んできた、桃色の鹿のケガを治してあげたことが最初で、

それ以外にも何度か試してみたことがあったが、いつでも上手くいくとは限らなかったことなどを話した。

「そうか、やっぱり・・・。きっと、琴美さんの、あの不思議な能力が遺伝したんやな・・・。信ちゃん。

この人の腰を治してくれたんは、ほんまにありがたいけど、その力、あんまり人前で使ったらあかんで、

世の中にはいろんな人がいてはるさかいな。またあんな事件になったら・・・」

「うん。わかった。気をつけるよ」というと

「お父さんは、このこと知ってるの？」と聞くので、直接話したことがないからわからないが、うすうす、気づいてるかもしれないことを話した。

「悟さんはもう、西の京の大池に行ってるの？そう。悟さんによるしゅういっというて」と言って立ち去りかけ、

「信ちゃん。おばちゃんは、信ちゃんや悟さんの味方やからね」と言ってくれた。

「わかってる。ありがとう」と伝えると、おじさんも

「おっちゃんも味方やで。今日のことは誰にもいわんさかい、安心してや」

「あんたが一番心配なんや、酒飲んだら、いわんでもいいことまでいつもベラベラしゃべるやろ」と

おじさんの頭を小突きながら出て行った。

大仏殿で一人きりになった。僕はこの時間が大好きだ。時計を見ると、山焼きが始まるまで、まだ一時間はありそうだった。

毎年、父と待ち合わせをしている、西の京の大池までは、バイクで飛ばせば30分で着くから、

もうしばらくここにいれそうだ。

僕は太公望の前に座ると、母のこと、そして今とっさに使ってしまったこの能力の事について考え始めた。

2. 母の思い出

母と父が初めて出会ったのもこの大仏さまの前で、しかもそれは、20数年前の今日、つまり、若草山の山焼きの日だったと、信次は聞いていた。

それも僕が今日してたように、若き父がお守り台などの片付けを終えて、帰ろうとしたとき、大仏様の裏の方から物音がして、見にいってみると、女性が出てきたらしい。

女性は東京から来た美大生で、仏像に興味があって、いろいろと見学しているうちに疲れてしまい、少し休んでいのだという。

父が彫り師の卵で、仏像について話してあげると、とても喜んでくれて、それから何回か、彼女が、父の職場兼おみやげ屋さんを訪れるようになり、やがて二人は恋に落ち、結婚したんだと、彦田のおじさん、おばさんから、聞かされていた。

母には、動物であれ植物であれ、優しくさすってあげると、みんな元気になってしまうという、不思議な病気治しの能力があったらしい。その能力で、傷ついた動植物や、ノミでケガをした父、腰痛持ちの彦田おじさんたちを時々なおしてくれていたらしい。

そうした母の行為は身内や親しい人たちの間では特に問題にはならなかったのだが、観光客が大勢訪れる「秋の鹿の角きり行事」の時に起きた、ある事件がきっかけで、大問題に発展したらしい。

江戸時代から行われている、春日大社の鹿の角切り。鹿苑に雄鹿を追い込んで、一頭ずつ押さえ込んで角を切っていく伝統行事の最中に、誤って高さ3mの見物場から、子供が落ちてしまったのだ。さらに悪いことに、そこに追い込まれてきた鹿が突進してきて、子供は角で数mも、はじき飛ばされたのだった。

救護室に担ぎ込まれた時には、すでに子供の呼吸は止まっていて、誰もがもう助からないだろうと、思いながら、救急車が来るのを待っていたらしい。

そんななかで、ボランティアで看護係をしていた母が手を当てると、生き返ったらしいのだ。

母は「自分は何もしていない」と言って、ごまかそうとしたのだが、子供の体を優しくマッサージする様子を、ちょうど「鹿の角きり」の取材に来ていたテレビカメラマンに

バッチリ撮られていたらしい。

夕方のニュースで「スクープ！奈良に奇跡の女性が現れる?!」と全国放送されてしまい、次の日から、病気を治してほしい人々が、父の小さなおみやげ屋兼仕事場に殺到したのだ。

そのため母は、父に置き手紙をして、失踪してしまったのだった。

それから三年後。失意のなかでも黙々と彫り物の仕事をこなす、父のもとに母が突然、帰って来たのだった。

それも3歳になる信次をつれて・・・。

人目を避けるため、母と信次は西の京の薬師寺の近くの父の親戚の家でひっそりと暮らし、父が週末に会いに来る生活が続いた。

信次もかすかに、週末になると楽しそうにやってくる父の姿や、両親と一緒に西の京の大池の周りを散歩した記憶が残っていた。

そして、母のおなかがだんだん大きくなって行って、どうしたのかたずねると、父がうれしそうに「もうすぐお前に妹ができるんだよ」と教えてくれた事も・・・。

悲劇は、そんな楽しい日々が続いていた、18年前の若草山の山焼きの日に起きたのだ。西の京の大池は、薬師寺の向こうに若草山の山焼きが重なるように見える、風景写真家やアマチュアカメラマン達にとってはベストスポットなのだ。

夜空に花火が上がり、それを合図に若草山に火がかけられる。火は瞬く間に、若草山に燃え広がる。

その様子が薬師寺の三重の塔のシルエットの向こうにダイナミックに写し出され、異元家も含めた多くの見物客が

その壮大な風景に酔いしれていた所に、成人式帰りの若者たちの飲酒運転の車が突っ込んで来たのだった。

まだ5歳だった信次はそれから後の事を、断片的にしか覚えていない。飛び交う悲鳴。大きな音。

そして池に落ちたのか、苦しくて息ができなくなって・・・。

次に思い出せる情景は、薄暗い、病院のベッドに寝かされた動かない母と、その横で泣き崩れている父の姿だけだった。

(母さん・・・) 人の気配がしたので、信次はふと横を向いた。

5mほど先に、人ではなく、桃色の鹿が立っていた。それは見覚えのある鹿だった。

鹿の方も驚いたようで「信次兄いさん。なぜここに？もう西の京に行ったんじゃないの」と言った。

信次は、震える声で「ありえない」とつぶやいた。それは二重の意味でだった。

一つは鹿が人間の言葉をしゃべったこと。

そしてもう一つは、この桃色の鹿とは10年前にも一度会っているということだった。

シカの寿命はそんなに長くないはず、それなのに、この鹿は10年前と変わらない姿なんて・・・

。

しかも今、「信次兄さん」といったのでは？

3. 桃色の鹿

信次は中学1年の冬の夜に一度だけこの桃色の鹿に会っていた。
それは、母の代わりに何かと世話を焼いてくれていた祖母も亡くなり、
みやげものの屋の6畳部屋に一人で布団をしいて寝起きし始めた頃だった。

ある晩、寝ようと、布団を敷いていると、裏の離れの仕事場から
父の怒鳴る声が聞こえてきたのだった。

慌てて裏庭に出てみると血のついたノミを持った父が仁王立ちしてわめいていた。
なんでも、厠から戻ってきたら、仕事場に桃色の鹿が入り込んでおり、
唯一残っていた母の写真立てを前足で踏みつけ、
なかの写真をむしり食べていたのだそうだ。

不思議なことに異元家には、母の写真がそれ一枚しか残っていなかったのだ。

母が亡くなって、急にお葬式の用意をしなければならず、
あわててパソコンに入っている写真を取り出そうとしたら、
なぜか母の映っている写真のデータが消えていたらしい。

そして、唯一残っていたのが、初詣の帰りに三人で撮ったプリクラで、結局、
お葬式ではそのプリクラの母の顔を引き延ばして使い、その後は仏壇に飾り、
父はその写真を仕事場に持って行っては、母によく似た観音様を彫っていたのだ。
そんな写真を食べられたものだから、よほど父には耐えがたいことだったのだろう。

父は信次の姿を見ると、我に返ったようで、事情を説明してくれた後、
驚かせてすまなかったと、仕事場に戻っていった。

そして今度は、部屋に戻って布団に入ろうとした信次が、驚きの声を上げそうになった。
そこには、足から血を流した桃色の鹿がうずくまっていたからだ。

震えている鹿を見ているとなぜか、父に知らせることが出来ず、

「大丈夫だよ、心配しないで」と言葉をかけてしまい、さらには母を思い出して合掌し、
パワーをもらえるようお願いして、優しく鹿の足をさすってあげたのだった。

最初は鹿も驚いた様子だったが、やがて震えも止まり、安心したのかそのまま、
すやすやと眠ってしまったのだった。

それは、信次にとっても初めての体験だった。一応、出血は止まり、
痛みも消えたみたいだが、本当に母の様に鹿のケガを治せたのだろうか？
父はきっと朝まで無心に、観音様を彫り続けるから、こっちにはこないだろう。
鹿に毛布を掛けてやり、足をさすっているうちに、

信次もまた、いつの間にか寝てしまったのだった。

朝、気がつくと鹿はいなくなっていた。そして、なぜか食べられたはずの母の写真が布団の上に置いてあった。信次には、どうやったかはわからなかったが、きっと、あの桃色の鹿が写真を返してくれたのだと思えてならなかった。

あの時の鹿だと思える、桃色の鹿が今、信次の目の前に立っているのだ、しかも人間の言葉をしゃべって！さらに鹿は信次の方にゆっくりと歩み寄ってきた。2 mぐらいまで近づいたとき、大仏殿の外から差し込む月明かりに照らされ、光り輝くと、何と人間の姿に変わり始めたのだった。

身長は170 cmぐらいあるのではないだろうか、すらりとしていて、ピンク色の髪の毛が肩までかかり、肌は透き通るように白く、目鼻立ちがすっきりした、信次の好きな松本零士先生のアニメに出てくるような、美しい女性だった。

「兄さんって、じゃあ君はもしかして、美希なのか・・・」信次は先ほど女性がいった、兄さんという言葉から連想して、質問した。（父は生まれてくるはずだった娘に美希という名前をつけていた。もちろん正式に市役所に届けてわけではないのだが、それが彼女だとすると・・・）その女性は頷くと、「あの時は、足の傷を治してくれてありがとうございました」と言った。信次は聞きたいことが山ほどあった。（やはり、あの時の鹿がそうなのか？でも妹は生まれてこなかったはず。どうして桃色の鹿が人間に、いったい君は何者なんだ？）だが、頭がこんがらがって声に出せなかった。

その時、大仏さまの裏の方で、エレベーターの扉が開くような音がし、数名が歩いて来る足音が聞こえた。信次はその姿を見て、とても現実の事だとは思えなくなった。歩いて来たのは三人の女性で、しかもその真ん中の女性は髪の色が、ピンクである以外は父が大切にしているプリクラの女性とそっくりだったのだ。

「か、母さん？」信次は思わず叫んでしまった。その女性も驚いた様子で、「信次なの？でも、なぜここに、この時間は西の京にいるはずじゃ・・・」と言った。右にいた女性も、驚いた様子で、「美希、どうしてここに人間がいるの、しかもタイムチェンジもしてないじゃない。ただちにタイムチェンジ、そして、メモリ・クリアーしなさい」といった。桃色の鹿から変身した女性は

「すみません」といいながら、ペンライトのようなものを信次に向けてボタンを押した。

そのとたん、信次は動けなくなった。いや、動けなくなったというより、女性達の言葉や動きが、

ビデオの早送りを見ているように見えるのだ。

「○☆△、救世主の★□・活動状況◇●・・・」

「中国★□、ドラコニアン●○△・・・」

「アメリカ▲◎、レプタリアン☆・◇・・・」しばらく情報交換が行われていたが、信次には、所々しか聞き取れず何をいっているのかわからなかった。

しかし突然、母に似た女性が信次の前に来て、じっと信次の顔を見たのだった。その目は紛れもなく母の目だった。「・・・」信次は何とか声を出そうとしたが、自分の口が少しずつしか動かせず、声がだなかった。（やっぱり、母さんなんだね）

「信次・・・大きくなったわね。・・・愛してるわ」そう言って頬にキスをすると、美希に「記憶を消去して、西の京の悟さんの所へ転送して・・・」と言いながら再び大仏の裏の方へ歩いていった。

「・・・ニューヨークへ○△◇・・・」

「・・・上海へは☆◎■・・・」そして、再びエレベーターの扉のような音。

突然、普通に動けるようになった、信次はすぐに走って大仏の裏に行ってみた。しかし、そこには誰もいなかった。振り返ると、ペンライトのようなものを向けて美希が立っていた。

「美希、お願いだ、母さんの記憶を消さないでくれ、頼む・・・」

「信次さん・・・」その女性は今度は兄さんではなく、信次さんと言った。ペンライトの光がレーザー光線のように信次にあたった。その瞬間、信次は大仏殿から消えていた。

4. 薬師寺のシルエットと山焼き

異元悟（いもとさとる）は、小さな慰霊碑の前に、自分が彫った二体の観音様を置くと、手を合わせた。

18年前の今日、ここで山焼きを見ていた悟たち家族の所に、若者達の乗った乗用車が突っ込んできて、多くの人が池にはね飛ばされた事故で、妻と、もうすぐ生まれてくるはずだった娘を失ったからだ。

毎年新しく彫った観音様を供えているから、本当は慰霊碑の周りに36体あるはずなのだが、毎年いつの間にか無くなってしまいうため、観音様は、今供えた2体のみだった。

観音様を持っていくことは、正確には窃盗罪にあたるんだから、被害届を出すか、あるいは盗られないようボルトか何かで固定した方がよいと、指摘されたこともあったが、どこかで誰かが、この観音様に手を合わせてくれているのだと思うと、このままでいいと悟は思うのだった。

息子の信次がまだ来てないようなので、池のそばに広がる、桜の林の中のベンチに腰をおろした。

18年前の事故の当日、搬送された先の病院の医師達は皆、「奇跡だ」といったらしい。なにしろ30人近い人間が猛スピードの車にはね飛ばされて、真冬の池に落ちたのだから、直接の打撲だけでなく心臓麻痺等で、死者は20人を超えてもおかしくない状況だったのだ。

ところが、搬送されて来た患者で、死亡したのは妊婦一人ただけで、他は全員軽傷だったからだ。だが、悟は知っていた、妻の琴美が、あの力を使ったことを。

あの時、自らも池に落ち、妻と息子を何とか岸に引き上げたときには、頭がボーとしていて、確信はもてないが、たぶん息子の信次はもう、息をしていなかった気がするのだ。その信次を琴美は、

自らの命を注ぎ込むようにして体をさすった。その後、今度は頭からの出血で目が霞んで、意識がもうろうとしてきた悟を抱きしめてくれた・・・。

そして、次々と池から引き上げられる人々の方に歩いていったのだ。琴美がその人たちに自らの命を分け与えるように、さすっている様子を薄れていく意識のなかで見っていた。

つぎに、悟が病院のベッドで頭に包帯を巻かれた状態で気がついた時には、琴美はもう、霊安室に安置されていた。

霊安室には、妻の遺体のみだった。事故に遭った他の人々は、悟や信次も含めて、全員軽傷で済んだと聞かされた時、悟は全てを理解したのだった。

妻が自らの命と引き替えにあの力を使ったのだと。

大池の方から、歓声が上がった。どうやら、山焼き開始の合図の花火が上がったようだ。

その時、後ろの方で、「うお！」と言う、うめき声とドスツという音がした。

振り返ると、桜の木の根につまづいて転んだのだろうか息子の信次が尻餅をついていた。

「お、信次。来てたのか」悟は信次に近寄ると、手を貸して立たせてやった。

「父さん！ここは、もしかして西の京？」

「どうした、信次。酔ってるのか」

「いや、そうじゃなくて。今、大仏殿で・・・」また歓声が上がった。

「お、山焼きが始まったみたいだな」二人は大池の方に並んで歩いていった。

(大仏殿での記憶が消されていない。きっと美希が消さずに、残してくれたんだ)

信次は美希に感謝すると同時に、さっき、母に会ったことを、父にしゃべってしまうと、美希に迷惑がかかる気がして、何も言わないことにした。

薬師寺をシルエットに燃え上がる若草山の山焼きはとても幻想的だった。

「ところで、父さん。母さんのお葬式に来てくれたっていう、東京の親戚の人とは、まだ、連絡とか取りあってるの？」母は一人っ子で、両親共すでに亡くなっており、お葬式の時には、東京から叔母だと名乗る女性が一人来ただけだったと前に聞いていた。

「いや全然ないな。あ、でも年賀状だけは、やり取りしていて、今年も来てたと思ったがな、どうかしたのか」

「じゃあ、それを見れば、住所とかわかるよね。実はさ、大学の就職課の人が、来週東京で、今年度最後の合同会社説明会をやるから、行ってこいって言うからさあ。

その時に一度、訪ねてみようかと思ってさ」

会社説明会の部分はウソだった。ただ、その人に会えば、さっきの事件のことが、何かわかるような気がするのだった。

しかし、この事で、父に余計な心配をかけたくなかったのだった。

父はちょっと不思議そうな顔をしたが、何も聞かずに、

「そうか・・・。気をつけてな」と言ってくれた。

「うん。わかった」まだ燃え続ける若草山を見ながら、信次はこれから何かが始まるような気がした。

大好きな銀河鉄道999で、主人公が地球から旅立つときのBGMが頭の中を流れていた。